

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第413回

兵庫県立大学の活動報告



増野 園恵
(兵庫県立大学
地域ケア開発研究所
所長)

マレーシアから招へい

災害看護における課題など学ぶ

マレーシア国際イスラム大学(IUIM)はマレーシア国内看護系大学7校のうち、公立大学で独立した看護学部を持つ唯一の大学です。イスラム教の理念に基づいた看護教育を行い、行政機関・公立病院等に多数の卒業生を輩出しています。この度、科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」の助成を受け、看護学部長のムハンマド・カミル・ビン・チェ・ハサン先生を含む大学院生・学部学生計10名を招へいしました。

◎ オンラインプログラム

事前2回(12月・1月)および事後1回(2月)のオンラインプログラムを実施しました。全員が初来日となる事から、初回は日本の医療の概要とともに、感染予防・日本でのハラル対応の現状等も含め、渡航全般に関する情報提供を行いました。

また双方の看護・看護教育に関する情報交換とともに、大学院生参加者には研究テーマをプレゼンテーションしてもらい、本学教員の研究室訪問のためのマッチング資料としました。

◎ 災害看護教育

地域ケア開発研究所において、災害看護の基本的能力についての講義・演習を行いました。防災・減災に関する計画立案、受援者とのコミュニケーション等、被災者・コミュニティのアクセスメント等、多様な側面から学習する内容とし、講義とコミュニケーション演習を組み合わせました。演習では本学学生有志らも参加し、英語によるディスカッションや質疑応答を通して災害看護に関する学びを深めました。

プログラムスケジュール	
1日目	来日
2日目	施設見学 @人と防災未来センター(神戸市)
3日目	学部学生との文化交流 災害看護の講義および看護教育の比較討議
4日目	災害看護・防災減災についての講義 およびコミュニケーション演習
5日目	施設見学・コミュニケーション演習 @神戸赤十字病院・兵庫県災害医療センター
6日目	学習のまとめ・リフレクション 研究会議、学習成果発表
7日目	帰国

◎ 施設見学

「人と防災未来センター」(神戸市)の見学では被災状況の実際や避難生活・復興プロセスを疑似体験しました。また神戸赤十字病院および兵庫県災害医療センターの見学実習では、看護業務の実際や、日常業務における防災対策、災害時のプロトコル等について体験的に学習すると共に、被災地域における緊急医療支援について机上コミュニケーション演習を行いました。

◎ 文化交流

国際交流課の協力を得て、ちらし寿司づくり、折り紙などの文化交流イベントを開催しました。また日々のプログラムにおいて、大学までの案内や終了後の買い物・観光、最終日の学習成果発表会でのファシリテーションなど、本学学生が多様な場面で参加者と交流する機会を持つ事が出来ました。また参加者の興味関心に合わせ、本学の講師・准教授を中心とした若手教員の研究室を訪問しました。

◎ 学習成果発表会

プログラム終了日には、本学学生と教員有志による昼食会の後、IUIM学生9名による学習成果発表会を開催しました。DMAT(災害派遣医療チーム)などの災害医療体制や、神戸赤十字病院の被災地への看護師派遣プログラムの他、避難所設営やトリアージなどの机上コミュニケーションはマレーシアの看



ドクターカーに乗車体験(災害医療センター)



災害看護講義で、避難時の物品を発表する学生



学習成果発表会で、IIUM学部長にメッセージカードを渡す兵庫県立大学生

世界中で災害の発生頻度が増し、激甚化が進んでいることから、災害看護へのニーズが高まっています。地域ケア開発研究所では、本プログラムの実施経験をもとに、海外の看護学生を対象とした短期の災害看護研修プログラムへと発展させ、今年度から実施を開始しました。日本でも蓄積された防災・減災、災害看護の叡智を広く世界に向けて発信していきたいと考えています。



神戸市の「人と防災未来センター」を見学

送り返し機関においては、帰国後にプログラムでの学びが他の学生や教員にも共有され、災害看護に対する関心が高まっています。今年11月に神戸で開催される世界災害看護学会には、同大の学生・教員の参加が予定されており、合わせて本学への訪問も計画されています。

護教育でも取り入れたい内容として発表されていました。発表会終了後は本学学生投票によるベストプレゼンテーション賞や手作りのメッセージカードの贈呈、IIUM学生らによる踊りと寸劇等が披露され、学術面に加えて文化交流の点からも大変充実した会となりました。全てのプログラムの終了後も学生同士で名残惜しく語り合う姿が見られました。

◎ プログラム評価

事後のオンラインプログラムでは、IIUM学部学生1名・大学院生2名のプレゼンテーションにより、本プログラムでの学習成果とプログラム全般にかかる評価を実施しました。研修内容については、講義、演習(体験)、グループ討議、施設見学と多彩な学習方法・機会が提供され、集中して楽しく学習することができたとのフィードバックがあり

◎ 今後の展望

ました。また、日本のムスリムに関する知識を基に、災害時の文化的宗教的配慮について指摘と提案がなされました。来日後、すぐにプログラムが開始となり、日本文化を深く学ぶ時間が取れなかったこと、災害看護以外にも、日本の看護医療の現状、自国との違いについてもっと知りたかったとの意見がありました。プログラム全体にわたる細かな配慮やホスピタリティに関する感謝の言葉が聞かれました。さらさらサイエンスプログラムを契機に、本学教員との共同研究や相互留学等の継続的な教育・学術交流の基盤を築くことができました。

プログラム終了後も、SNSを利用して学生間で看護や医療、学生生活や互いの生活文化についての情報交換が続いています。本学の学生にとっては、文化的ダイバーシティを直に経験する機会となりました。